

養魚飼料へのDDGS利用の背景

全国養鱒振興協会

会長理事 小堀彰彦

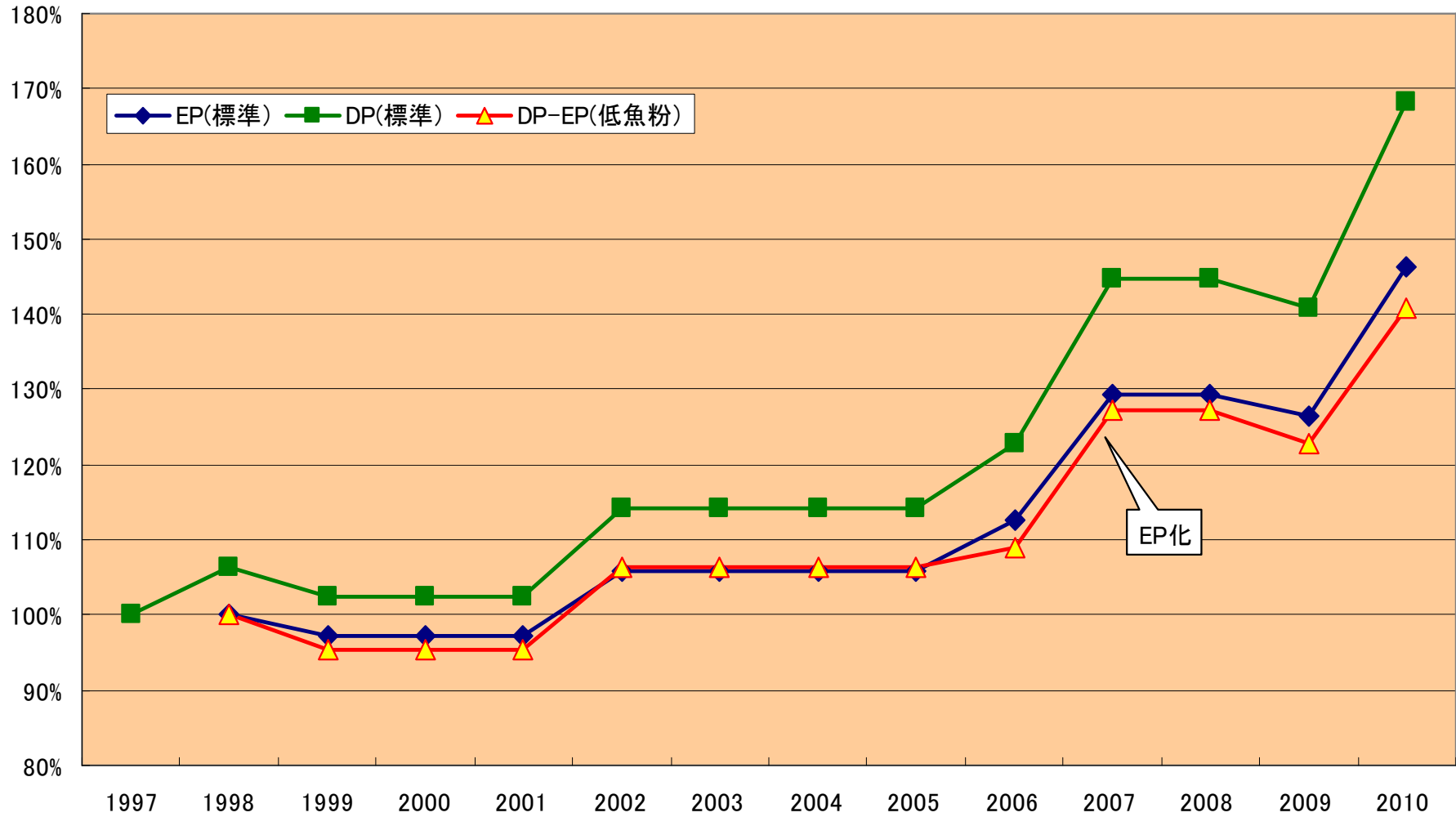
2010.09.08 アメリカ穀物協会セミナー

魚粉削減飼料の必要性

- ① 養鱒用スタンダード飼料の価格は、輸入魚粉依存に変わってから、EP化も含めて現在までに**約70%も値上り**した。(97年比)
- ② 値上りの原因は全て主原料である魚粉価格の高騰による
- ③ 生産コストの上昇分を販売価格に転嫁できない現状
- ④ 販売量の減少→生産量の減少→経営疲弊
- ⑤ **即効性のある解決策が必要**

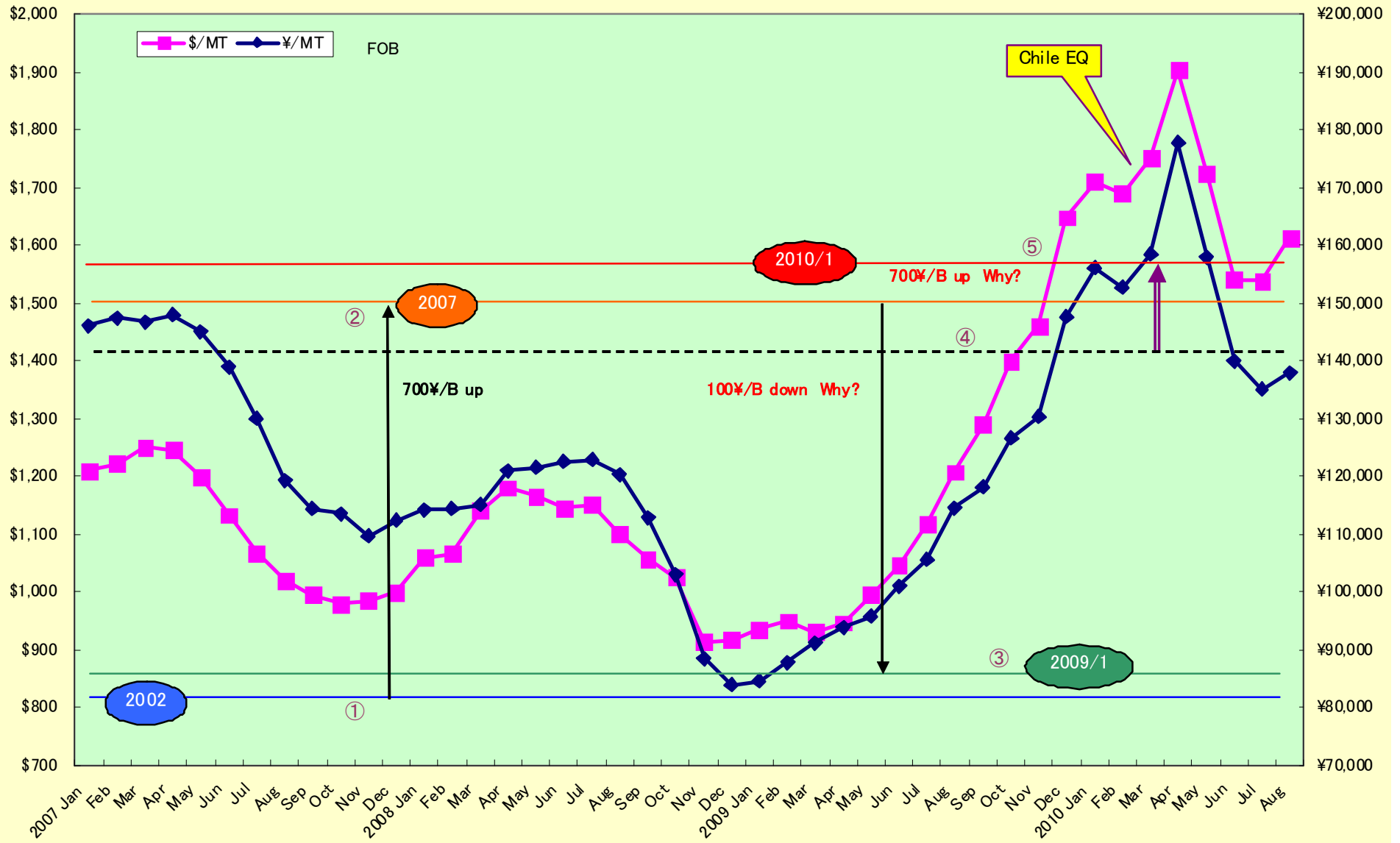
配合飼料の価格変動

JF愛知淡水
8月仕入価格

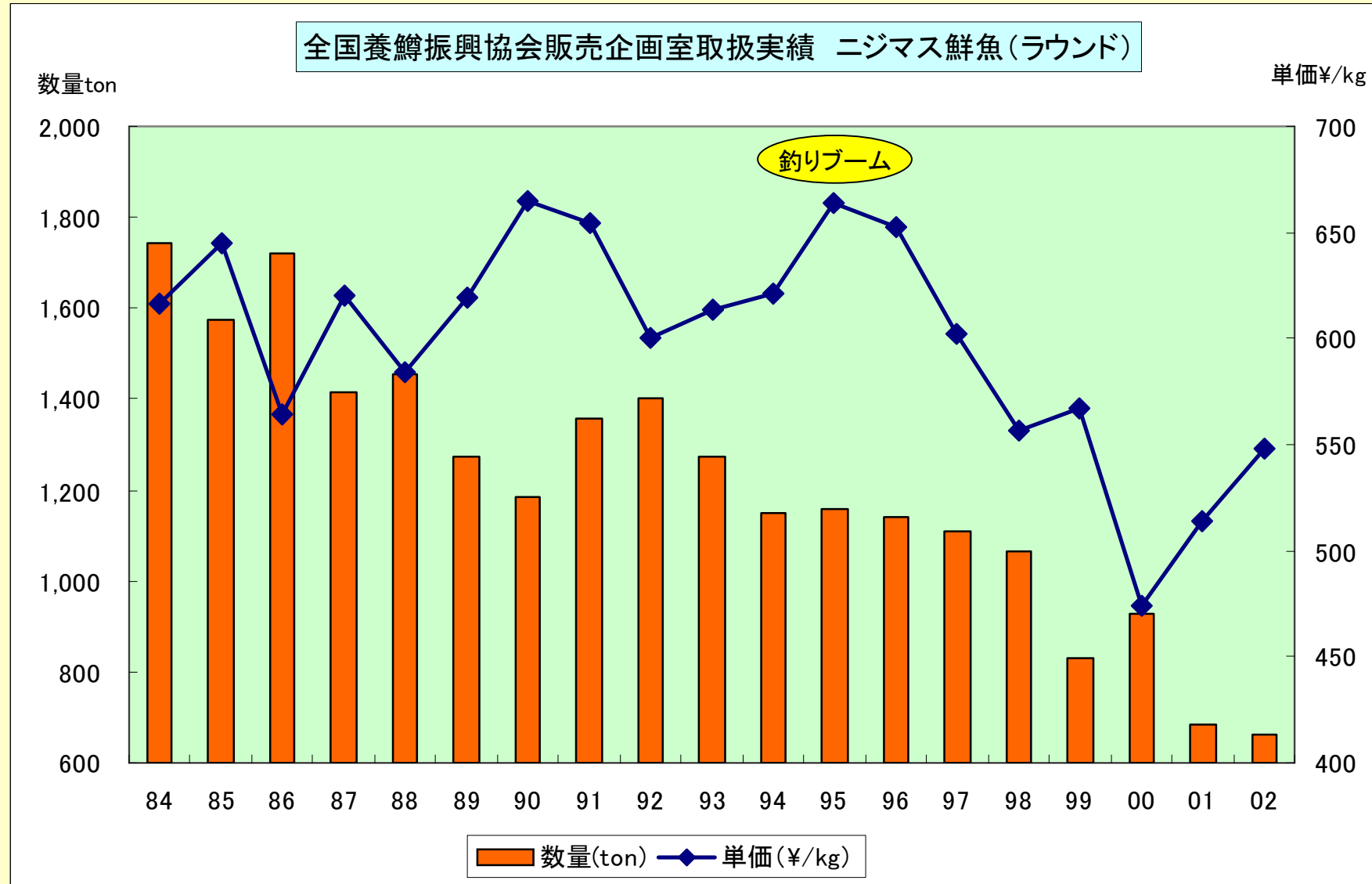


魚粉価格の推移

Chilean Fish Meal / Super Prime Hist.500



ニジマス鮮魚の販売量と価格の推移(東京市場)



なぜ魚粉配合率を減らす必要があるのか

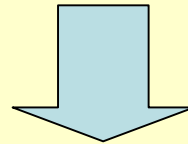
- 輸入魚粉に頼る現状では、気候変動・漁獲規制・国際需要・為替レート等の変動要因により、大きく価格が変動する。
- 養魚用飼料原料では最も配合率も価格も高い魚粉を削減することで、**飼料価格の変動幅を抑える**。
- 高魚粉→高成長→生産増→販売増→所得増という図式はもはや成り立たない。
- 期間生産量の増加は必ずしも所得増に繋がらない
- 期間需要に見合う生産→**効率より餌代の削減優先**
- 養魚飼料では魚粉が主原料。畜産飼料では副原料。**食材としての価格競争**では決定的なハンディになる。
- 生産コストが上がっても魚価は上げられない
- 飼料代の値上り分はそのまま利益減となる
- 飼育環境に応じた2種類の飼料が必要

新たな養鱒用配合飼料の開発

- **植物性原料**も大きく変動するが、魚粉に比べれば単価は安く、**価格の変動幅は小さい**。
- 魚粉配合率を削減しても、油脂でカロリーを補うため、飼料価格は期待するほど下げられない。ただし、**変動幅は抑えられる**。
- **魚粉高配合の餌=高い餌=高性能の餌 ≠ 儲かる餌**
- 魚粉代替原料として期待できる肉粉・肉骨粉等の動物性原料も現状では使用は困難。
- 今回の危機を契機は新たな配合設計を考えるチャンス
- 濃縮植物性タンパクなど可能性のある原料はある
- 結晶アミノ酸でAAバランスを補正

魚粉代替原料としてのDDGS利用の背景

- ① 畜産レンダリング品などFM代替原料として利用できる原料はあったが、価格や輸入障壁(関税)の問題から不可
 - ② MM・MBMの利用→BSE発生以後事実上困難
 - ③ SBM・・・トリプシンインヒビターの問題
 - ④ CGM・・・筋肉や体表への着色の問題
- ②と③はどこまで配合率を高められるか？



第三の代替原料としてのDDGSの利用

CPLレベルの安定性とタンパク源としてのコスト

筋肉・体表への着色は？

消化率は？・・・排糞量の変化・増重コスト